鳩と山猫の時代

結城 洋一郎

振り返れば僅か二年半前の二〇〇六年四月七日、吹き荒れる小泉旋風と自らが引き起こした「堀江メール事件」の失態の下で、瀕死の状態に陥っていた民主党の党首に小沢一郎氏が選出されたことが、同党の再生と今日の政権交代への出発点であった。

小沢代表は就任挨拶の中で、氏が青年時代に見て感銘を受けたというヴィスコンティ監督の名画『山猫』の中のセリフを引用して次のように述べた。

「変わらずに生き残るためには、自ら変わらなければならない。」「よりよい明日のために、かけがえのない子供たちのために、私自身を、そして民主党を改革しなければならないのです。」「まず、私自身が変わらなければなりません。」

『山猫』(Gattopardo)というタイトルは、物語の主人公であるシチリアの老公爵の紋章から取られたもので、小説の原作者は、老公爵をしばしばライオンや山猫になぞらえ、獅子の強靭さと威厳、豹(pardo)のしなやかさと狡知を兼ね備えた人物として描き出している。では、自ら一頭の山猫になろうと願った小沢氏は変身を遂げただろうか。

少なくとも次の一点において、氏は明確な変化を我々の前に示している。

かつて、戦後右翼の一方の雄・田中清玄から、そのアメリカ一辺倒の姿勢を批判された小沢氏は(『田中清玄自伝』文芸春秋、一九九三年、三六三ページ参照)、昨年一月二八日の記者会見において、アメリカが引き起こしたイラク戦争に大義はなかったと批判するとともに、「特定の国の軍事行動を支援するというのは憲法に抵触するし、そういう方法はとらない」と明言するに至っている(この発言は私の知る限り全てのマスコミによって黙殺され、唯一「全文掲載」を行った産経新聞の記事も、何故かこの部分だけを削除している)。

また、小沢氏はこの記者会見の中で、「『政治は生活』だから、国民生活を守れないようで国家もへチマもない。」と述べた。かつて、国家主義的傾向の強い自民党の中枢に君臨した小沢氏の経歴からすれば、ここにも顕著な変化の一端を垣間見ることが出来るであろう。

こうして小沢氏の下に再生の一歩を踏み出した民主党は鳩山由紀夫委員長へと引き継がれ、戦後初めての本格的な政権交代へとまい進することになる。

ところで今を去る一九五五年、鳩山一郎を総裁とする民主党と吉田茂を中心とする自由党とが合同して自由民主党が結成されたわけだが、その後半世紀を超えて、吉田茂の外孫・麻生太郎総理を戴く自民党が、鳩山一郎の孫・由紀夫委員長の民主党によって政権の座を追われるというのも、不思議な歴史のめぐり合わせである。

それでは、新たな国家指導者・鳩山由紀夫氏はいかなる政治、いかなる国家を目指しているのであろうか。

氏の祖母薫の父・寺田栄は、世上、右翼団体として知られる「玄洋社」の社員であるが、玄洋社は当初、土佐の「立志社」と並ぶ自由民権運動の中核をなし、会員の多くはフランス革命思想の強い影響を受けていたのである。

また祖父・一郎は、日本では稀なフリーメーソンの会員として世界に知られ、フランス革命の標語の一つ「友愛」は、メーソンの思想が投影されているとも言われている。

由紀夫氏が掲げる「友愛」の精神も、あるいはこうした影響の下にあるのかも知れない。

さて、いずれにせよ今後の日本は、鳩と山猫の指導する民主党政権に委ねられた。山猫はジャッカルやハイエナから羊たちを守る役割を果たせるだろうか。鳩は天空を駆け、平和と繁栄の木枝をもたらすことが出来るだろうか。

その答えは恐らく、鳩と山猫によってというよりはむしろ、彼らに一票を託した国民自身の手によって与えられるべきものなのであろう。

〈ゆうき　よういちろう・小樽商科大学教授〉